

研究発表①

シンガポールの「木刻運動」－南洋華人社会の西洋美術受容の一側面

羽田ジェシカ(Jessica T. Lyu-Hada) (九州大学非常勤講師)

発表者は 2003 年から数回にわたってシンガポールに残された 1930-1950 年代の華語刊行物を対象として、当時の美術活動についての調査を行った。その結果、この期間シンガポールの華人社会で木版画の活動が盛んであったこと、そして 1930 年代には既に、中国「木刻運動」のリーダとされた魯迅と直接の関わりを持った作家たちが南洋で活躍していたことが見えて来た。つまり、魯迅を導師として仰ぐ広東出身の作家たちによる、「木刻運動」の一環としての木版画創作活動が、この時期のシンガポールに存在していたのである。

1930 年代の中国の若者は、ドイツ、ソ連、日本などの地域の木版画を、他の西洋美術のジャンルと同様に、新しい「美術」として捉えていたようである。彼らにとって、木版画は先進的な表現媒体であった。作家たちの多くは美術学校で西洋画を専門とした人たちであり、中には日本に留学して美術を学んだ人たちもいた。例えば広州の作家たちは、日本留学の李樺を中心に木版画活動を行い、日本とヨーロッパで流行のスタイルや題材を、木版で表現していた。しかしその後、日本の軍事活動の拡大が中華民族主義を煽動していくに伴い、「美」のために作られた作品は現実の社会では無価値とみなす風潮が、美術界を席卷するようになる。木版画制作も民族運動の「木刻運動」と形を変えた。日中戦争の拡大につれて「木刻運動」はますます盛んになり、南洋の華人社会まで広がった。広東出身の作家たちのネットワークにより、「木刻」はシンガポールの華語学校に深く根をおろし、1950 年代末まで華人美術の重要なジャンルであった。

シンガポールにおける「木刻運動」の精神は木版画だけに留まらず、芸術創作一般に影響を与えた。「木刻」作家たちは、美術とは何か、美術は何のために作られるのか、という根源的な問いに大きな関心を寄せ、エキゾチックな視点から異民族の女性、熱帯風景などを描くことを、真の美術創作活動ではないと批判した。この理念は 50 年代の華語華人の若者の間に広く支持されていたが、その後の政治情勢の変遷に巻き込まれ消えて行った。当時の論議と活動を記録した華語刊行物は、政治的な理由で僅か一部分しか残されていないが、当時の華人社会の西洋美術受容の実況を映し出す貴重な資料である。本発表はこれらの一次資料を用いて、シンガポールの「木刻運動」に光をあてることより、当時の南洋華人社会における西洋美術受容の一側面を検討する。